

声

草むらで鳴いているのは
虫たちの限りない
生きていることの合唱

世界中の時計がとまったような
小春日和の午後
樹木の陰の小鳥のおしゃべり

水だつて
魚だつて
にんげんにはわからない声がある

CDから流れる
マリア・カラスの
美しいソプラのひびき

乾いた砂に炸裂する
砲弾の轟きの映像は
ひとの心から声を奪い去る

赤ん坊は
言葉を知らないから
泣いてうったえる

野口武久
(詩人)

第75号

涸林

SAKABAYASHI

随筆特集

『赤光』の歌、あれこれ
『あらたま』の歌、あれこれ

茂吉短歌の鑑賞①
茂吉短歌の鑑賞②
安森敏隆… 8

絵と文

ほろ酔い詩歌紀行
日高昭二… 12

親という仕事
宮地智子… 17

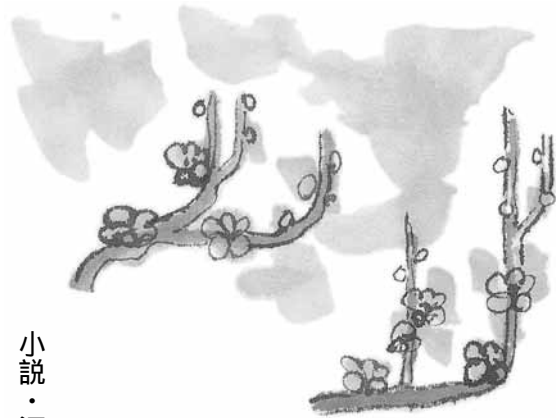
ランタナの花
内野潤子… 15

春のヘルスチェック〳〵血中CPK値で運動量のチェック〳〵
杉本忠夫… 19

詩
消された名前
池井優… 4

陶芸品音痴
高橋和島… 6

野口武久… 1



小説・江戸神仏歳時記(16)

山王日枝神社

郡

順史

38

表紙・グラビア…高松張子

日野の法界寺と鴨長明のこと

志村有弘…21

「深い主題」

志村栄守…23

「キレる老人」の一人として

桐原良光…25

絵と文 日々音無

佐川毅彦…27

人の話を聞かない人たち

片岡義男…28

母の三原則

片岡義男…30

絵と文 「短い展覧会の話」

さかもとふさ…32

ある回想

永岡慶之助…34

はな

山本千明…36

消された名前



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

大阪 難波 かつてここに存在したのが大阪球場、この球場をフランチャイズとしたのは南海ホークスであった。現在、熱戦を展開した球場の跡地は「なんばパークス」として再開発され、大きなビルが立っているが、その二階の「キャニオンストリート」にはホームベースとピッチャーズプレートをかたどった御影石製の記念プレートが設置されている。本塁とマウンドがあった位置の真上である。そして七階には、南海ホークスと大阪球場の歴史を展示する「メモリアルギャラリー」が、五

十年に及んだ同球団の足跡を伝えている。ギャラリーには、南海ホークスの栄光を彩った監督、選手が写真と共に紹介されているが、そこに野村克也の名は一切見当たらない。野村は三歳の時、父を戦争で失い、貧しい母子家庭で育ち、京都の峰山高校から南海にテスト生として入団、入団三年目の春のハワイキャンプで鶴岡監督によって一軍に抜擢されると、やがて四番にすわり、八年連続ホームラン王、戦後初の三冠王など文字どおり攻守の要として一九

五〇年代から六〇年代にかけてのホークス黄金時代を支えてきた。鶴岡一人監督に率いられたホークスは「がめつい野球」、「ど根性野球」を展開、ファンも増えていった。杉浦、野村のほか、皆川、広瀬、岡本、スタンカ、森下、国貞など個性溢れる選手たちが「鶴岡一家」を支えた。応援席には、作家の藤澤恒夫、漫才師の芦の家雁玉、画家の中村貞以、コメディアンの堺駿二などの有名人もよく顔をみせていた。しかし、パ・リーグでは優勝しても日本シリーズでは、なかなか

巨人に勝てない。一九五九年、遂にその巨人を杉浦の四連投で倒して日本一になり、御堂筋で行った「涙のパレード」は浪速つ子を熱狂させた。

南海ホークスの悲劇は監督の交代に失敗したことからじまった。一九六五年のシーズンを最後に鶴岡は辞任、蔭山和夫コーチが後任監督に就任した。蔭山はかつての早稲田のスターであり、

「親分」といわれた鶴岡の人情采配に代わる近代野球の理論にも通じていた。鶴岡は東京オリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）か、サンケイ（現ヤクルト）スワローズの監督を引き受けるべく明日上京するという深夜、蔭山監督が急死したのだ。蔭山は、鶴岡監督がチームの不振にたまりかね、「指揮官が悪いと部隊は全滅する」とシーズン中休養したとき、代理監督として見事な手並みを見せただけに、大いに期待されていたが、シーズンオフの五日間だけの「幻の名監督」に終わった。主力選手は鶴岡の自宅へかけつけた。

「親分、もう一度南海のユニフォーム

ムを着てください」

鶴岡は酒が入ると荒れる欠点があった。その時もかなり酔っていたのだ。懇願する選手に鶴岡は言った。

「わしに金儲けさせんか。ノム、なんやその辛気くさい顔は。なにが三冠王じゃ。わしを男にしてくれたのはスギヤ・・・」

その一言で野村は傷ついた。鶴岡監督は復帰し、その後三年間指揮をとったが、野村の気持ちは次第に離れていった。南海一筋二十三年に及ぶ鶴岡監督が引退、コーチから昇格した飯田徳治が一年間指揮を執ったが、戦後の球団史上はじめての最下位、一九七〇年から野村が選手兼任で監督の座に着いた。

以後九年、野村の下、南海は資金の不足もあって十分な補強も出来ないまま、かつての阪神のエースでプライドのかたまりであった江夏豊を「野球に革命を起こさんか」と南海に招いてリリーフに転向させ、他球団で力を発揮できないでいた選手を「野村再生工場」で戦力に変えるなどやりくりして、一

九七三年にはバリーグ優勝を果たした。

だが七七年のシーズンを終える前に監督を解任された。沙知代夫人の存在とその行動が引き金になったといわれたが、野村自身は「鶴岡元老によって追われた」と信じ、鶴岡元監督が亡くなった時葬儀に顔を見せることもなく、僚友杉浦の告別式にも出席することはなかった。

評論家時代は「野村スコープ」を活用した次の投球を予想する画期的な試みを行い、「プロの野球はこれほど奥が深いのか」と解説に新しい面を切り開いた。監督として球界に戻ると万年Bクラスの弱小球団だったヤクルトを三度日本一に導くなど、名監督のひとりとみなされるにいった。

現役最年長監督としていまでも楽天を率いる野村、原点である南海ホークスの歴史からその名前が消されたのは日本野球界にとっての不幸としかいようがない。

陶芸品音痴



高橋和島

(作家・郷土史家)

- 6 -

わたしの住む東美濃（岐阜県東部）は古くから陶磁器を地場産業としてきた土地で、昨今も「美濃焼」の名をもつて和洋食器を全国市場に送り出している。

「美濃焼？知らんね」

と首をひねる向きもあるつかと思うので付け加えておくと、陶器の代名詞であるセトモノという言葉を生み出した焼物どころ愛知県瀬戸市はわが町に

隣接しており、歴史的には美濃焼もセトモノの一部とされている。

こうした土地だけに、陶芸家と呼ばれる人が少なからず見られる。

資格などにつき正確な定義を知らないで曖昧な言い方になるが、この陶芸家の数は増えているのではないかと推測している。

というのも、家内工業的零細企業が多い窯元が和洋食器を量産してみても、

安い中国陶磁器が輸入されているせいで採算を取りにくい。陶芸品づくりを選ぶほうが賢明という近年の事情があるからだ。

陶芸家の沢山いる土地に住んでいるせいで、焼物については多少の講釈を垂れることができるが、実は焼物音痴である。つまり、見る目が全くない。

これはひとえに不勉強と生まれつき審美眼に欠けているせいだが、焼物の

評価が難しいこともある。

地元にはたずら好きな歯医者さんがいる。九十を越えた高齢の先生の趣味は陶芸。あるとき、若手の陶芸家二人を自宅に招き、自分が造った志野のぐい呑みと有名な陶芸家の作品とを並べて見せ、どちらのできがいいかと問うた。

二人の陶芸家が揃って指差したのは素人の手すさびのほうだったから、老先生は大いに笑った。

比べられた名のある陶芸家の腕が大きかったと解すべきか、若い二人のプロに目がなかつたと見るべきか、わたしには判らない。

地元のあるモザイクタイル製造会社が竣工したばかりのショールームで披露パーティを開いた。

経営者のYさんが陶器の水差しに酒を入れてパーティ参加者に注いで回った。彼は水差しを掲げ、誰もが知っている人間国宝（無形文化財）K氏の名を口にした。高価な器を使っていることを示したかったのだろう。

アクシデントはこの後ほどなく起こった。

Yさんの手にあつた水差しが突然床に落ち、中身の酒と共にあえなく砕け散つたのである。驚く参加者の目に、陶器の把手だけを握りしめて苦笑するYさんの姿が映った。水差しの把手部分にひびでも入っていたのだろうか。

Yさんは呟いた。

「あーあ、百万円がパーだ。でも、もう一つありますから」

水差しの値段が本当に百万かどうかは別としても、相当高価なものであつたことは間違いない。

Yさんは同じK氏の作品だという別の水差しを持ち出し、来客にまた酒を勧めるため会場内を回り始めた。

二度目のアクシデントはわたしの目の前で起こつた。

来客の一人に笑顔で何か話しかけながら酒を注ごうとしていたYさんの手から、またも把手だけを残して水差しが床に落ちてしまったのである。

Yさんは豪放磊落を装って笑い飛ば

したが、高価な器を立て続けに二つも失つたのだから、顔は強ばっていた。

焼物に詳しい来客の一人がなぜ二つの水差しが割れたかを解説した。ひと口で言うと、焼きが甘く、液体をいっぱい入れて持ち運べるだけの造りになっていなかったのだ。

人間国宝陶芸家K氏はもう故人であるが、没後も彼の評価はいぜん高い。

しかし、使いものにならない陶器にわれわれ素人はどうやって価値を見出したらいいのだろうか。

床の間にそつと飾って眺めるだけで満足すべきなのだろうか。

そう言えば、三十年以上も前の話になるけれど、新築祝いにもらつた花鉢を使つたら、水漏れで真新しい床の間にシミができてしまい、閉口したことがある。

志野も織部も黄瀬戸もよくわからない焼物音痴は、少なくとも器として使用可能なものを陶芸家諸先生に造っていただきたいと願っている。

『赤光』の歌、あれこれ 茂吉短歌の鑑賞①



安 森 敏 隆
(同志社女子大学教授・歌人)

し(『赤光』・大正二年)

近代短歌の歌聖とも言われた斎藤茂吉の歌を何首か気ままに鑑賞してみたい。そこには、「歌聖・茂吉」と言うよりも「俗人・茂吉」が見えてくるのである。だがそれだけでは茂吉が茂吉ではない。俗人である茂吉の「平凡なる非凡人」である側面が鑑賞できたとき、再び「俗人・茂吉」から「歌聖・茂吉」が蘇ってくるのかもしれない。

茂吉は、ひたすら走ったのである。ただ、ひたすらに道を走ったのである。だが、それは現実の「道」であるというよりも「わが道」であったのである。ことさら「わが道」を二度繰り返して「わが」を強調しているところに注目せねばなるまい。さらに「堪(こら)へかねたる」は、茂吉の心境に全面的にかかってくる言葉である。

この歌には「七月三十日信濃上諏訪に滞在し、一湯浴びて寝よう湯壺に浸かっていた時、左千夫先生死んだといふ電報を受取った」と言う詞書が附されている。実は、茂吉は赤彦と翌日、八ヶ岳に登ることを約してひとまず信州の「布半旅館」に来ていたところであった。東京の小泉千樫から電報を受け取って、急いで駕籠屋を呼んで、島木赤彦宅まで走ったのである。一連では「螢」が点滅し、たばこの赤い「火」

が見え、罌粟畑のむこうの湖が「光」り、わが道の暗「さ」とは逆の光や「赤」が配置され、さらに茂吉の心の暗さを照射する役割をしていることにも注目せねばなるまい。初版『赤光』(以下、同断)「悲報来」十首中の一番目の歌である。

のど赤き玄鳥(つばくらめ)ふたつ
屋梁(はり)にゐて足乳(たらち)ね
の母は死にたまふなり(『赤光』・大正
二年)

茂吉の作品の中で、もっとも人口に膾炙された歌である。事実と言えば事実であろうが、「のど赤き玄鳥(つばくらめ)(生」と「足乳(たらち)ねの母(死)の対象性が何ともくつきりと出てくる。言ってみれば「生」けるものと「死」にゆくもののコントラストである。母の死という厳肅なその一瞬に、茂吉はもう一つのモノを見ていたのである。黒光りする「玄鳥(つばくらめ)」の喉の「赤」であり、死にゆく

「母」の背後に押し寄せる闇の「黒」である。

「死にたまふ母」の連作は、全体が五十九首(母の歳に合わせて「アララギ」初出は五十六首)からなっている。

大げさに言えば、この歌を含めて連作「死にたまふ母」は「母」の「いのち」への言問いであり、相聞であり鎮魂・挽歌であった。五七五七七の五七の繰り返しの「ことば」によって、母の「いのち」を、または他者の「いのち」をうたうことによって、慰藉し浄化するところに、この形式の特立性があるのである。相聞は相手の「命」を取り込み、鎮魂は死者の「いのち」を解き放ち、慰藉し、浄化するのである。「死にたまふ母」五十九首(その二)中の二十三番目の歌。

はつはつに触れし子なればわが心(こころ)
(今は斑(はだ)らに嘆きたるなれ(『赤光』・大正二年)

一体何があつたのであろうか。「はつ

はつに触れし子」とは、題名にもなった「おひる」のことである。殊に、茂吉の純なる心が「はつはつ」の修飾によって顫動してくるようである。だが「はつはつに触れし」とは、一体いかなることであろうか。

「はつはつ」という形容動詞は「はつか」から来たのである。「かすかに」とか「やつと」のことで「とか」「ほんのちよつと」とかと言つことになる。万葉集に「はつはつに人を相見て」という用法があるので、「ちよつとした縁で触れた子」とでも解釈しておいたらよいであろう。でもこの一首の眼目はここで終わらず、この顫動は「今は」によって急回転して茂吉の心からの「嘆き」の歌として昇華されているのである。「おひる」(その一・その二・その三)四十四首中の「その一」の七番目に出てくる一首である。「おひる」という女がいたのである。この「おひる」のモデルについては、従来よく調べられていて茂吉つきの女中「照井ひろ」だという見解が一番有力視されている。

『あらたま』の歌、あれこれ 茂吉短歌の鑑賞②



安森敏隆
(同志社女子大学教授・歌人)

近代短歌の歌聖とも言われた斎藤茂吉には、生涯で十七冊の歌集がある。

『赤光』に続いて、ここで取り上げる『あらたま』は第一歌集である。おさな妻である斎藤てる子のごことで煩悶する歌がまず最初にあり、先にも触れた「歌聖・茂吉」と言うよりも「俗人・茂吉」が徴表してくる。だがそれを五七五七七の短歌にすることによって、自己を含めて何もかも浄化・止揚する「平凡なる非凡人」の茂吉が見えてくるような気がする。

あかあかと二本(いっほん)の道(みち)とほりたりたまきはる我(わ)が命(いのち)なりけり(『あらたま』大正二年)

一本の道が、まっすぐに眼前にとおっているのである。その一本の道を見たら茂吉の「いのち」がそれに重なってきておもわず「我(わ)が命(いのち)なりけり」とうたったのである。この初期の段階の茂吉を「写生」という近代短歌のリアリズムで結ぶには、何とももったいないほどの幻想性を孕

んで輝いてる一首である。みごとくらしい初期の茂吉短歌の特立性を徴表している。一本のあかあかと輝く外部の「道」と茂吉のわれの内部の「命」が一体化して、アマルガムしている。「道」という言葉の象徴性(たとえば、人生の「道」を介在させながらも、茂吉の代表的な「写生」の歌になり、近代短歌の究極のような歌として今日まで鑑賞されてきた。だが、これ以上の言語のブレがあると、何のことが解らぬぐらしいの象徴性を獲得した、「写生」とは縁遠い歌になっているのである。この歌

は「一本道」と題する一連八首の冒頭の一首である。

はるはると一（ひと）すぢのみち見
（み）はるかす我（われ）は女犯（にょ
ぼん）をおもはざりけり』あらたま
大正二年）

同じ一連の「一本道」中の四首目の歌である。この一連の中には、この奇妙な「女犯」の歌が一首挟まれてある。「女犯」とは、仏教用語で、僧が不邪淫戒を犯して女性に交わることを言う。ただこの一首、その「女犯」を決して思わないぞ、と言う歌である。逆に言えば、この強い決断の背後に、「女犯」のことがとことん迫ってきていることを思わせる一首になっていると言つことである。

この期、斎藤紀一の娘「てる子」と一緒になれるかなれないかの一点において、まことに煩悶する現実的状况が現前していたことが背景にあるのではないかと思われる。この「一本道」一

連八首には、「秋づける代々木の原の日にほひ馬は遠くもなりにけるかも」「かなしみて心ねぎ来むえにしあり通りすがひし農夫婦はや」と言う初出未詳歌が二首、最後に付与されている。

この二首は、それまでの抽象的な発想と違つ、具体的な「代々木の原」の固有名詞と具体的な「農夫妻」がうたわれていることを覚えておかなばなるまい。長崎留学時代を経て、写生論を確立した『あらたま』編纂の時に付与されたものと思われる、初出未詳歌である。

朝（あさ）あけて船（ふね）より鳴（な）れる太笛（ふとぶえ）のこだまはながし竝（な）みよるふ山（やま）』あらたま・大正六年）

『あらたま』の最後におかれている「大正七年漫吟」中「長崎へ」十二首中の最後の歌である。詞書に「箱根より帰れば、おもひまうけぬ長崎に行くこととなりつ。十一月はじめ一たび東

京長崎間を往反す。十二月四日辞令を受く。十七日午前八時五分東京を發し、十八日午後五時五分長崎に著す」とあり、東京を發つて長崎に来たときの歌であることがわかる。自ら欲してきた長崎でない（義父の紀一に、医業に励まず短歌に明け暮れていた茂吉が無理矢理進められた）だけに、下の句の「こだまはながし竝みよるふ山」の韻律が、静かに、そして沈痛にすら聞こえてくる。

野太い「太ぶえ」の声に、同調し、そして心を落ち着けていこうとする長崎について、「一目の明けた茂吉の「こころ」が此処にはあるのである。此処には、寄りそつてきてくれるべき伴侶のてる子の姿は、今はない。この後、時々、茂太を連れてきて、気楽に遊んで帰るてる子の姿が彷彿してくるのである。この期、茂吉は、医学教授として勤めながら、あまり歌は作らず、その変わり「アララギ」の基本方針になった「短歌に於ける写生の説」を完成することになるのである。

ほろ酔い詩歌紀行



日高昭二

(神奈川大学教授)

未熟な者、取るにたりない者、またそのような者を罵っている話として、「へなちよこ」という言葉がある。漢字にすると「埴猪口」と書く。

大言海 には、その語源がくわしく記されている。明治十四、五年頃、新聞記者の野崎左文らが酒宴の際に用いた、外部に鬼面を、内部にお多福面を描き、酒を入れるとじゅうじゅう音がして酒を吸い泡立ったという楽焼の杯から、この語が生まれたのだというのである。

こつした未熟者への揶揄、嘲笑が歌

の世界にも転じて、いわゆる「へなぶり」という狂歌の流行をみることになる。このほうは、明治三十七、八年頃に当時の流行語などを折り込みつつ新しい趣味を詠み込んだ歌をいい、その中心には正岡子規門の阪井久良伎があり、その著『へなづち集』などが知られている。「へなづち」とは粘土のことで、「へな」ともいい、この土でつくった猪口がつまり「へなちよこ」というわけである。

久良伎の「へなぶり」は、旧来の和歌的抒情を断ち切った韜晦趣味が特徴

的であるとされるが、それをひとひねりして明星調の星重趣味を批判的にとらえた歌人がいる。石川啄木である。

啄木の明治四十二年四月十一日の日記に、与謝野鉄幹宅で開かれた歌会のこと記されているが、その中に「余はこのころ真面目に歌などを作る気になれないから、相変らずへなぶってやつた」という言葉がみえる。その気分を歌でいえば、「今日も亦(また)をかしく帽子うちかぶり浪漫的が酒のみに行く」という歌になる。

この歌には、歌会に参加しつつ、役

にも立たぬ歌を作っている自分に対する、ある種嘲笑的な態度さえうかがわれる。みずからの生活を省みて、まさしく落伍者でもあった自分を「へなぶつて」いるともいえようか。逆にそこからまた、歌を「悲しき玩具」とする批評性があふれてもいるのである。

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

こころざし得ぬ人の

あつまりて酒のむ場所が

我が家なりしかな

酒のめば鬼のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

啄木に代つて、酒は現実の苦惱にまっすぐつながつている。それぞれの苦惱を抱いた友が我が家にあつまつて酒をのむという、生活の一断片をそのまま

歌という形式に投げ込んだところに、詩人啄木の真骨頂があるだろう。

あはれかの国のはてにて

酒のみき

かなしみの滓を嚼ることくに

啄木は、故郷岩手の洪民村を出て上京、やがて明治四十一年に函館・小樽へ、そして釧路へと漂泊し、その釧路の地ではじめて酒の味を知ったという。それを回想した歌が「あはれかの国のはてにて酒のみき」という歌である。

また、歌集には収録されていないが、釧路の酒が孤独な流離の感慨とともにあったことは、その地で詠んだ「天地（あめつち）にすがる袖なしおのづから手は汝（な）れにゆくあはれ盃」の一首にもくつきりと表れている。当時の日記には「我を忘れんと酒に赴いた釧路」での「悲しい覚醒」とともに、創作への「覚悟」を抱いて「釧路を逃げ出した」経緯も記されている。かくて釧路からふたたび東京へ出た

啄木は、都会の酒場に足を踏み入れる。その代表歌が次の一首である。

赤赤と人日うつれる

河ばたの酒場の窓の

白き顔かな

歌われているのは、北原白秋の影響をとどめる、赤い夕日と女の白い顔の、感覚的で退廃的な酒場の光景である。

「河ばたの酒場」とは、白秋や高村光太郎などがつどった日本橋小網町河岸か、両国橋畔や永代橋畔などで、啄木もそつした河端の酒場に入りびたっていた。

しかし彼の酒は、白秋らの情調的で耽美的なそれとは異なつて、最後まで生活の苦惱とともにあったというべきであろう。彼の酒の歌には、憤怒と悲哀とで発酵された底知れない味がする。

今日よりは

我も酒など呷らむと思へる日より

秋の風吹く

ヒマラヤの蒼い芥子

中西美子



あれは、何年前のことだったか。私のお気に入りの花屋さんで衝撃的な出会いをしたのです。それは、澄み切ったブルーのポピーが私の目と心をつかんでしまった事です。店の人に花の名前を尋ねると「ヒマラヤの蒼い芥子」と言っじゃありませんか。天空の花園、冷たく澄んだ空気がつべんにイメージが膨らみ頭の中をぐるぐるまわってわくわくしたのを覚えています。それ以来見つけたときは買い求めますが、なかなかお目にかかれる代物ではありません。鉢物があったので大事に育てようと思いましたが、五月の暑さに無残にも解けてしまいました。七十年くらい前、探検家スマイスがヒマラヤで見つけた「ヒマラヤの蒼い芥子」メコノプシスアクレアタは、インドのナンダデヴィ花の谷に生息しているヒマラヤの花の女王です。私が見つけた物は、かなり徒長していましたが確かにスマイスが表現した「黄昏の空の色」(ほんのり赤みをさしたブルー)をしていました。また会える日を楽しみに花屋通いをしていきます。

ランタナの花



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

季節の風というのは、嬉しい思い出と悲しい思い出を緋(な)い交(ま)ぜて吹いてくるものだ。

十二月の風の中には、淋巴が腫れて左足が腫れて動けなくなった夫の姿が浮かんでくる。

サイクリングが大好きで、寒い日も暑い日も遠い光ヶ丘公園まで走り、時々小さな花の鉢など買って下げてきてくれた。藍色の花萼や、ランタナ等という安くて丈夫な花たちが、夫の亡くなっ

た庭に葉を広げ、花を咲かせている。それは三年前の健康診断で見つかった。小さな肺の影から発していた。医師は「このレントゲン写真を持って専門の大きい病院に行きなさい」と言った時、夫は「どつしても行きたくない。もしこれが悪いものでも、検査されたり、手術するのはいやだ」と言っていた。なかなか。

私はかかりつけの医師の所にそのレントゲン写真を返しに行き、本人の意

志を伝えたのだった。当時八十歳になっていた夫に対して医師は「それは本人が決めるのだから仕方ないですよ。検査したり手術したり治療した方が長く生きられるか、このままにしておいた方が長く生きられるか、今のお歳を考えるとどちらとも言えませんね」と言われた。

子供達にも相談すると、皆父親の言う通りにした方がよいと言つことに決まり、私もその時は、それでよいと自分でも納得したのだった。

本当にその後の三年間は、何の支障もなく毎日サイクリングから帰ると、書齋で何か書いたり、クラシックの音楽を聞いたり、相撲のテレビを見たり野球は毎晩こ鼻肩(ひいき)の横浜ベイスターズを応援して、点が入ると大きな声で「よし、よしよし」と叫んだりしていた。

こういふ暮らしが、いつまで続くのか私の胸の中に、小さな影のことは時々ふと浮かんでも、すぐに消えてほとんど忘れた状態の毎日を送っていた。

三年経って夏の或る日、突然小さな影は大きく体を支配しはじめた。

腫れた左足は、始めはさほど不自由ではなく、それでも近くの公園にサイクリングができる程だった。

その頃から、自然療法を信じていた上の娘がいろいろと父親の脚によいことをしてくれるようになった。生姜湿布、枇杷温灸などを丁寧にしてくれた。

元々娘は大学時代の親しい友人が癌で亡くなって以来、自然療法を信じるようになって父親のことについても、病院で亡くなった友人を見て、最後まで家で看護しようと真つ先に自宅介護に賛成してくれたのだった。

父親は上の娘より下の娘を偏愛していたのだったが、自分の脚が腫れてからは、上の娘に頼りきりとなり、同居している上の娘が外出すると、心細がるようになっていった。

秋になると腫れは重くなり歩行困難となってきた。娘はガーゼの上にメリケン粉と枇杷の液と、枇杷の葉を刻ん

だものを混ぜ、それをゴマ油を塗った父の脚にまきつけて、三角布でしっかりしぼり、「お父さん、なるべく長い時間我慢してね」と言う、それなのに父親はすぐ湿布が苦痛で「早くとってくれ」と言い出す。そして一度は奇跡的に夫の脚の腫れが見事に消えた事もあった。私と娘はとび上がって喜んだが、本人は信じかねる表情だった。再び腫れてきてやつと夫は「病院に行く」と言ってくれた。

関西に住む長男の嫁と二人の娘と私の四人が付き添って、大きな病院に検査にゆくことになった。

検査の結果は、体中に広がったものの影が姿を現した状態であった。自宅療養するには、一度入院してから、訪問の医師を紹介して下さるという事になった。

一月五日に入院が決まったが、私は介護の疲れで自分が倒れてしまった。二人の娘が、交代で病院に通ってくれたが夜は、ベッドから下りて這ふ父のために病院から呼び出された娘

が、深夜駆けつけたこともあったらしい。

夫は交代で来る二人の娘の名前を大きく紙に書いてベッドの枕元においてあったという。

一週間足らずの検査入院から退院してからは、時折認知症の様になり自宅なのに「ここはどこか」等と聞いたりした。それから一ヶ月、幸いな事に訪問の医師は実に優しく最後迄手を尽くして下さった。

亡くなる一日前、ふと吾に返つた夫は、ベッドの傍に立つ私に「お前大丈夫か」と尋ねてくれた。私は「大丈夫よ」と常の日の如く何気なく答えたが、それが最後の会話となってしまった。いろいろあったけれども、ふり返った時、その最後の夫の言葉が今の私を支えてくれていると思ふ。

十二月の空気の中で、現世から解き放たれた夫を見るように、枝葉を広げて咲くランタナの花に水を注いでいる毎日である。

親という仕事



宮地 智子

(詩人)

精神科医である私の夫はある時しみじみと洩らした。「どんな仕事よりも一番難しい仕事は親であることだよ。」三十年間共に暮らした伴侶の言葉として私にこれ程共感を与えてくれた言葉はない。考えてみれば親と子の関係ほど理不尽なものはない。それはお互いに相手を選べないからである。家族とはそういうものである。けれど人類はこの理不尽な関係に何とか折り合いをつ

け、嘗々として今日まで生き延びて来た訳である。

社会を構成する最小単位としての家族にはその家庭の数だけのそれぞれ違ったドラマが展開されていることを想像すると、私は人間というもののおしき、人生というものの不思議さを感じずにはいられない。

私は殆んど時間を家の中ですごしている。今では両親と兄弟たちとも

に過ごした時間よりも夫と子供たちとも過ごした時間の方が長くなった。家族の者がそれぞれ職場や学校に出払った後の家の中は何と静かな時間であることだろう。けれどこの静けさの何と豊かなことだろう。当然わが家にも過去から現在まで、さまざまな事件が幾度となく小さな波となつて襲いかかつては引き返し再び大きな波となつて襲つて来るといった具合であつた。

文学作品を読んでいて、ふと母親としての立場で読んでいることに気づかされることがある。例えばアメリカのユダヤ人作家ポール・オースターが一九七九年に書いた「見えない人間の肖像」を読んでいた時がそうだった。この作品の主人公にとって、父親は謎めいた存在である。その謎は身内に起こつた悲劇的事件によつてもたらされたものであることが推理小説仕立ての筋書きで次第に判明されるのであるが、小説とはいえ、あるいは小説であればこそ、私はそこに作者の生(なま)の声を聞いてしまうのだ。主人公の父親は

他人と意思を交わしたいという欲求も能力もいっさい欠いた、いわば「そこにいるのにいないような人物」である。当然ながら主人公である息子に対しては関係も拒んでいる。即ち、愛情を持ち得ないのである。その主人公が「二十五歳になつたつて父親の愛情はほしい」という言葉を洩らす箇所がある。なる程そつだらう。私はこの言葉によつてふと、あるひとつの私の抱えている問題の解決へのヒントを見出したように思えたのである。他でもない。私自身の息子のことである。

つい三、四年前、ニート（…）つまり働かず、学ばず、家の中でのらくらとしていた青年たちのことを社会現象としてそのように呼んでいた時期がある。わが家の息子もまた、大学を卒業したものの希望する会社にはことごとく落ち、なすすべもなく暮らしていたのである。たばこの火を自分の腕に押しつけるような自傷行為を目にすることもあり母親の私にとってこれ程辛いことはなかった。二十五歳になつたつ

て父親や母親の愛情は欲しいのだ。ふり返つてみると私の息子は二人の姉を持つつ末っ子として生まれた男の子だから赤ん坊の頃から甘やかされて育つた。けれどこれは決して愛情などではない。

夫は待望の男の子に自分と同じ医者にさせるべく自ら厳しく勉強を教えていたことがあつたが、息子はその重圧をはね返し「くそじじい」と叫びながら家を飛び出したこともあつた。それ以来夫はまるで手の平を返したように自由放任主義を貫き通した。私もまた同じようなものだった。中学、高校とサッカーに夢中になり、机の前でじつとしていたことのできない息子にはどのようにつけてよいかわからず早朝練習に出かける息子のために大きいおにぎりと大きな弁当箱を拵えることしかできなかったのだ。話しかけるとそつぽを向く息子。父親とは唯一、サッカーの試合をテレビで一緒に見るだけの関係。そんな息子が目の前で、毎日家に居て膝を抱えてうなだれている。夫はある日、息子を知り合いの精神

科のクリニックに連れて行つてくれた。

そこには、デイ・ケアにやつて来る同じ年頃の青年たちが居た。心の病いを抱えた青年たちの中に入つて、ある時はギター持参で、ある時はサッカーボール持参で、息子は次第に生き生きと活動的になつた。それから一年間、保健福祉士の資格を得るため学校に通つた。こんなに真面目に勉強する息子を見るのは初めてだった。さて無事に学校を終え資格を取得しある精神病院に就職したものの一週間で辞めてしまった。責任の重大さに耐えられなかつたのだ。夫はそんな息子を非難しなかつた。私は家の中で息子と一緒に料理をしたり掃除をした。二人でレストランや展覧会に行つた。息子と二人で外出するなんて予想外にちよつと嬉しかった。息子の表情も穏やかになり、私もまた自身の傲慢さに気づいたのだ。働かなければ生きて行けない（…）ことを漸く悟つた息子は、現在は自分に合つた職場を見つけて何とか頑張つている。ちよつと頼もしく思う。

春のヘルスチェック 血中CPK値で運動量のチェック



杉本 忠 夫

(虎の門病院
内分泌代謝科嘱託医)

近年マスコミで有名になったメタボリックシンドロームと同様に糖尿病の罹病率も毎年高くなっているといわれています。両疾患とも摂取エネルギーの過剰、運動不足などその病因は多岐にわたっているようです。

その中でも運動量の減少(不足)が大きな役割を果たしているといわれております。

ちょっと見回してみますと、乗用車が自転車代わりになり、都市では地下鉄などの交通手段が発達し通勤が非常に便利になりました。

また、土木作業・農作業なども機械化され力仕事をしている光景はほとんど見られなくなりました。また、家庭でも家庭電化製品の普及で主婦も身体を動かすことが極端に少なくなりました。このようにどこからみても運動量が減少していることはうなづけます。したがって、メタボと糖尿病の発症を防ぐには運動不足の解消が最重要課題になってきています。したがって、平素からある程度以上の運動量をこなすことが大切です。

ところで、運動するうえで、運動量

の目安になるものがあれば重宝します。たとえば、ウォーキングでは万歩計、水泳、マラソンではその距離が運動量の目安となります。

ところで、通常の血液検査で運動の種類と関係なく運動量の目安になる検査項目があります。それは血中CPK(=CK)と呼ばれている酵素です。そこで、今回はこの血中CK値と運動について若干ヘルスチェックしてみたいと思います。

このCKとはクレアチンキナーゼという筋肉細胞の中で働いている酵素です。この酵素は筋肉の運動(収縮)に必要なエネルギーを供給する重要な役割を担っております。

ところで、CKにはBB型、MB型、MM型の三種類があります。BB型は脳、MB型は心臓(心筋)、MM型は骨格筋肉(横紋筋)にそれぞれ分布しています。

実地の臨床面でみてみましょう。日本人の三大死因の一つに急性心筋梗塞があります。この心筋梗塞(心筋の壊

死)の発作時に血中のMB型CK値が急激に高くなります。そして、このCK値の急激な上昇が、心筋梗塞の重要な診断指標の一つになっています。

このように心筋(筋肉)が損害を受けると筋肉細胞のCKが血液中に遊出し、そのため血中CK値が高くなるのです。

では、筋肉の病気、たとえば甲状腺機能低下症などホルモン異常による筋症、またリウマチ性筋痛症など筋肉の疾患では血中MM型CK値が高くなります。診断が確定し、不足している甲状腺ホルモンの補充療法やステロイド剤で治療を開始しますと血中CK値は著明に改善していきます。

では、一般の人の血中のCK値はどのようにになっているのでしょうか。男性サラリーマンでみてみますと血中CK値一〇IU/L(以下単位省略)前後で、家庭の主婦では血中CK値は七〇前後です。やはり、女性の方が一般的に運動量が少ないためか男性より血中CK値は低いようです。

そこで、ある興味深いエピソードについてみてみましょう。主婦の方が検診で高脂血症の指摘をうけ、受診されました。診察では理学的に異常は認められませんでしたが、その日の夕方、検査室からこの方の血中CK値が極めて高値の一万以上を示した、と緊急異常値報告がされてきました。

また、その後このCKがMM型であると追加報告がされてきました。

外来で診察した際には特に異常を認めなかったのですが、この方に改めて筋肉痛などの症状を伺ってみましたところ、筋肉痛も、他の症状も全くないとのことでした。

身体には支障はなかったのですが、家庭の事情で前々日までほとんど身体を動かすことがなかったそうです。ところが受診の前日に、数年ぶりに得意の水泳を一時間以上されたとのことでした。

それまで、ほとんど運動をしていなかった筋肉が、水泳(運動)を急激に行ったことで血中CK値を大きく上昇

させたと考えられました。その後、軽く水泳を続けて筋肉も水泳に馴れ、約二週間後にはその方の血中CK値は百五十まで下がりました。このようにジムなどで急激に筋肉トレーニングなどの運動を始めますとMM型CK値は急激に上昇します。

では、運動量の異なる個々の生活パターンでは、血中CK値はどのようになっているのでしょうか。趣味で百姓を楽しんでいるある男性では、いつも血中CK値は二百五十〜三百五十くらいでした。

また、相撲のある力士では、負け越している時の血中CK値は三百〜三百五十程度でしたが、勝ち越している時の血中CK値は七百前後と約二倍も高くなっていました。つまり、日々の筋肉トレーニングを怠りなく行ったことが白星を勝ち取ったと考えられます。

今年から血中CK値が二百前後になるように身体を動かして糖尿病等を予防しましょう。